「私の『戦後 70 年談話』 3 」　　2025 年 12 月 08 日

『フーテンの寅さん』を撮り続けた山田洋次監督は、李香蘭こと山口淑子さんの〈あの頃の日本人はどうしてあんなに威張っていたのでしょうね〉という言葉を引いて、〈あれから 70 年、あの時代の何十何百万人もの在満の、いや満州だけではない何千万人の日本人全体が中国や朝鮮半島の人々に対して抱いたおぞましい見下した感情はぼくらの世代が死んでしまえば消えていくのだろうか。しかし威張られた側の感情、差別され、人間扱いされなかった側の人たちの悔しさや憤りは簡単には消えずにいつまでも重く深く民族的な感情の奥底に残されているのではなかろうか〉と書いている。差別、抑圧する者は、そのことによって、自らの心を荒廃させていることに気付くべきである。

アニメ『火垂るの墓』を制作した高畑勲氏は〈なぜ憲法 9 条を死守しなければならないか。それは、これが戦後日本国の初心であり、理想であり、それに縛られることこそが、近隣諸国との友好の基礎であり、国際的に日本の位置を安定させる力だからである。この絶対の歯止めをなくせば、次なる歯止めがいかに掛けにくいか、戦前戦中から今日の原発事故に至る私たち日本人の、空気を読んで大勢に順応し続ける「ずるずる」を見ればわかる〉と書いている。憲法 9 条は戦争放棄と武器の不所持であるが、私は、アジア諸国への謝罪を含んでいると理解している。これを基礎にアジア諸国と平和な関係を結ぶことが、出発であったはずである。ずるずると大勢に流されるようなことをしてはならない。

前中華人民共和国特命全権大使を務めた丹羽宇一郎氏は〈日本は自由貿易をしないと食べていけません。だから日本人ほど、世界の中で平和を希求する国民はいない。原爆を落とされ、原発事故も起こして、世界でいちばん平和を望んでいるのは日本人なのだ。このことを語り継ぎ、守っていく必要があります。憲法を守り、他国民を殺さないことで、日本は世界からリスペクトされるような理性的な国民だということを示してきました。それをどうして壊そうとするのか、まったく理解に苦しみます〉と書いている。日本は、食糧自給率が 40%に満たない。自由貿易が命綱で、そのためには、平和であることが必須条件である。戦争しない国と認知されるような日本を造ることが最も有効な安全保障である。

沖縄大学名誉教授の新崎盛暉氏は〈60 年代後半、ベトナム反戦運動と結びついた沖縄民衆の闘いの高揚によって、米軍の排他的沖縄支配は不可能になる。そこで、日本の軍事的役割を強化する政府の一環としての 72 年沖縄返還が実現する。沖縄返還によって在日米軍基地の管理統合が行われ、ヤマトの米軍基地はさらに 3 分の 1 に減少し、国土面積 0.6%の沖縄に米軍基地は約 75%が集中するという状態が生まれた〉と書き、〈沖縄はそのような未来を受け入れることはできない。日本国民はこうした現実に目を閉じ続けるのか。戦後 70 年の今、平和とは何か、民主主義とは何か、自治とは何か、当事者の自己決定権とは何か、人民の抵抗権とは何か、が問われている〉と訴えている。

沖縄に深い関心を持ち続けた政治学者の C・ダグラス・ラミス氏は〈平和憲法も安保も両方欲しい層はアメリカにだけではなく、沖縄にも「ただ乗り」している。つまり、彼らは「安保」は欲しいが、その「安保」から生まれる米軍基地は欲しくないので、それをなるべく沖縄に置くことにしている。厳密にはこれは「ただ乗り」ではなく、「7 割引き乗り」と言った方がいいだろう。安保条約の代価の 70%以上を、人口の 1%の沖縄県民に払ってもらっている〉と書いている。沖縄の犠牲の上に本土安泰を貪っている状況である。米軍人による事件、事故、強姦は日常的に起こっている。台湾有事を煽られ、沖縄諸島はミサイル基地化している。沖縄の真価はアジアの平和のかけ橋の役割を果たすことではないか。